

粉雪の降る日は

笹原 実穂子

赤いブーツが氷の塊の上にとったと思った
ら、両手をつけて、ペしゃんと氷った雪の山
に座っていた。お尻がじーんと冷たく痛く、
礼子は思わず下腹に手をあててしまい、ふっ
と苦笑いをした。

そばに転がった赤いバッグを、パンパンと
たたいて、雪を落とす、たちあがった。夜の
十二時だというのにさつきから、粉雪が降っ
て空は白く、変に明るい。

「いやよっ」

「頼む、その代わりに僕は一生、僕のできる限
りのことをする」

昨夜遅くまで話しをした武の顔を、思い出
していた。

礼子は初めてあがった診察台の冷たさを、
今でも腰のあたりのどこかに感じる時があ

1

る。

だって、本当にそうだと思った。生理は三
ヶ月無いし、好きだったお肉は、考えるだけ
で吐きそうになる。両の乳房はさわると熱く
て熱くて……。

「妊娠はしてません。子宮頸管にポリープが
あったので、取っておきました。二センチも
ある大きなものだったので、少々出血がある
かもしれませんが、大丈夫ですから、一週間
後に、来院してください」

礼子を診察した医者は、カルテに目をやり、
そこから目を離さなかった。

若い三十代の医者は、いくら職業とはいっ
ても、今、診察台の上で足を開かせ、医者自
身の指を膣へ挿入して婦人科を診察した礼子
とは、目を合わせづらいのだろう。

「一応検査に出します。生理がその時まだな
かったら少し、ホルモン剤を使いましょう。
三十代で更年期になる人もいますから」

市販の妊娠検査薬シートは、薬局で買って

2

はきたものの、まだはつきりするものが恐くてトイレの棚の上にあげたままだった。

診察が終わり、病院の外にでると、携帯が鳴った。携帯の画面の絵写真は、笑った武の顔が表示されている。

「武先生、礼子です」

「どうだった大丈夫かい……。出血は多くない？」

「ええ、今は少しです」

「そうか、悪かった。大事にして今度の教室は無理しないで休んだほうがいいな」

「武先生、ちがうのです。そうじゃないのです」

礼子は形はよいが、厚ぼったい唇を動かさうとしたとき、

「じゃ、また連絡する」

ぷつんと電話が切れた。

私のせいじゃないわ。武先生が勝手に……。それにポリープだとか、三十歳で更年期かもなんて失礼な医者だった。今少し出血して

るのだった事実なんだし……。

それから三日間礼子は、ただゴロゴロとストープの前で寝そべって、週刊誌を読んだり、テレビを見たりしていた。出血は止まっていない。ポリープを切って取っただけだから、そんなに具合の悪いわけではなかった。

でも武先生とのこの間の電話で、いきがかり上、子供を墮したことになるってしまったので、起きてはいけないような気持ちになっていた。そうすると不思議と感傷的になり、もの悲しくなってきた。アパートの窓に顔をふつつけて、あてもなく降りつづける白い雪を、窓からただ眺めていたりしていた。

そのうち悪いのはだんだん武先生のような気がしてきて、

「電話かけちゃおう」つぶやくと、礼子は受話器を取って耳にあてた。

「もしもし」

変に落ちついていている武がでた。きちんとした静かな家庭の風が、受話器を通して伝わっ

てくる。

「先生……」

はつとして息を飲む武先生の白い顔を感じた。

「はいはい、明日お休みするのですね、どうぞお大事に」

向こうで勝手にしゃべって電話が切られた。礼子は受話器を椅子の上にほうり投げて、白い小さなバラの模様のベッドへ、あお向けに倒れた。

そのままアパートの天井板を見つめていたが、

一分もすると、急におかしくなり、

「ははは……」笑い声をたてた。

「なあにあれ、先生困るのね」

笑いながら急に涙がでてきた。

「えっどうして、私悲しいの？」

礼子は奥さんのいる人と初めてつき合った。いつでも落ちついた態度で、それまでつき合っていた亨一とは全くちがいで、武先生のそば

にいただけで礼子はゆったりとして、心が自由になったように、平和になった。

毎日のようにグループホーム「愛」でおしめを取りかえている礼子は、なにしろ美しいものにふれたかった。そんな気持ちで夏に、新聞の広告欄を見ていたとき、目の前に光が見えるように引きつけられたものがあつた。

手宮の丘で

栗の木に抱かれた私は

空と海の青さのちがいがいもわからなく

赤い葡萄をすっぽり口に入れ

けだるい甘さに酔狂した

ああ太鼓の音が聞こえる

ドンドンドンドンドンドン

祭りの囃子が恋うように鳴っている

皆んな着飾って

子供達は紅をつけ

花びらのように舞っている

……

詩の一遍だった。

そんなあこがれで受講した。月二回の市民講座の「詩を書こう」という教室だったが、生れて初めての合評というものはすごかった。教室の机はコの字型に並びかえて、まず持つてきた自分の詩の作品を朗読して、それから武が今の詩についてひとりひとりあてて、意見をいわせていた。

「この行はいらないわね」

「こんなの詩にもなっていない」

「この人は詩人じゃないわね」

「ただ言葉を連ねているだけじゃない」

それはそれはすごかった。

礼子の詩はみなに削られて一行しかなくなってしまう。最初、そんなものなのかと思ったりもしたけれど、段々、腹立たしくなっ

7

きた。

礼子のたどたどしい詩では、激しい集中攻撃を受けるだけだった。

初めて詩を書くのは礼子一人で、あとの人達は、どこかの詩誌に入ってるか、昔から詩を書いている人達ばかりだった。

美しいものを求めて入ったのに、こんなさまざまな世界とは……。教室は子供の手が離れた、主婦が多かった。

もう今日でこの教室辞めよう。月謝払って、こんなに落ちこむ所なんて、何の意味もない気がして帰りかけたとき、

「礼子君、帰りちよつとつき合える時間あるかい」

と「詩を書こう」の講師、今井武が呼びとめた。

「そこの喫茶店じゃ、みんなに会うとまずいから、僕の知ってるスナックに行こう。いいかい」

皆に会ったら、まずい、何がまずいの……。

8

礼子は心でくり返して、それでも後をついていった。

ススキノと一緒に歩くと、色とりどりの浴衣の若い女の子たちが、小さなきんちゃくを手に持って、笑い声をあげながら礼子とすれちがって行った。

「今日は、豊平川で花火があつたんだね」

「何年も私見に行つてないです」

半同棲の亨一は花火とか、七夕とか、何でも風情のあるといわれてるものには、興味がなかった。もちろん文学の話などは、したことがなかった。

礼子の部屋からふつと亨一がいなくなつて、帰つて来なくなつたとき、礼子はなんとなくほつとした。そして自分の部屋がこんなにすがすがしく、きれいだったのかと思つた。亨一のこととはとくにきらいだった。

「礼子さんお酒は」

「少しだけ」

「少しだけつていうのはくせ者ですねー」

9

はっはっはつと武先生は笑っている。

「文に才能あるよ」

自分の詩のこといつてるとは最初礼子は思わなかつた。

いつも合評で耐えれないようなこといわれているし、たどたどしい自分の詩が才能などということばでいわれるなんて、急に心がふくれてゆれた。嬉しかった。

夜空の星のきらめきのようなただ美しい世界にふれたく入つた教室、それに、いつか自分も年をとつて、世話している老人達のようになるのかと思うと、あんないじめのような合評がなければ、まだまだやめたくない詩の教室だった。

武先生のこと教室の誰かがいつていたけど、七十歳と聞いている。

礼子がいつも仕事で介護している老人は、七十歳の人もいる。武先生を見ることによつて、老人への希望を礼子は持ちたかつた。

このことを機会に、教室の帰りは武先生と

いっしょに帰るのが多くなっていった。

つき合っていた亨一は自分の立場が悪くなると、すぐ大きな声を出す男だった。礼子はそんな言葉で罵倒されると、自分も興奮して我を忘れ、そのあと気分が悪くなった。

詩の教室の武先生はちがっていた。礼子が仕事が終わって、ズタズタに疲れ切って、もう一言もしゃべりたくないようなときでも、待ち合わせの、いつものスナックのカウンターで先生の横に腰かけると、いつのまにか、腕をからめて笑っていた。

「先生って、いやし系ですね」

いつものように武は、ウイスキーの水割りの入ったコップを、礼子の顔のほうへ、ちょっと傾けて、目で笑った。

「ねえ、ママそうよね」

「礼子ちゃんが可愛いからでしょう」

ホホホホ……。ママのきれいなソプラノの

11

笑い声が店内に響いて、それが合図のように、何人かの客が赤いドアを押して入ってきた。

武に会釈したあと、

「ママ、今日寒いね。すっごくしばれるよ」

「寒波がきてるそうよ。ほら早くストーブの前の椅子にお座りなさいよ」

「ああ、あつたかい。ストーブであつためると、手がじんじんいうよな」

「今日は、お通し、湯豆腐もあるわよ」

「ありがたい。それにして」

ママと常連客との会話がつついている。

「でようか」

いつものことだった。

混んでくると、武は礼子を軽く小さくうながした。そして行き先は、もう決まっていた。礼子は外に出ると、武のコートの上からすべるように手を組み、自分の胸へ武の腕があたりようにしめつけた。

雪道を二人が歩くと靴がキュッキュツと鳴った。

12

礼子が笑うたび、息が結晶のように白く流れる。

星空も凍って、今夜はしばれが強かった。

礼子は武先生と、ススキノをぬけて中島公園近くを歩くと、ネオンが美しく瞬くように見えた。

でも礼子一人で歩いたときは、ただケバケバしいネオンに見えるから不思議だった。

「カラオケまた唄うの？」

「ええ、先生もデュエットいっしょにして」

どうしても甘える声になってしまう。

「いや僕は礼子君の聞いているだけでいいよ」

「だめ、だめ、歌わせちゃうわよ」

武は若い亨一の愛撫とちがって、ゆっくりとゆっくりと、どこまでもゆっくりと、宇宙の呼吸のように永遠に止まることのない愛撫だった。

礼子は火のように体が熱くなり、

「先生、お願い、礼子」

と催促してしまうのが常だった。

13

亨一は自分だけ満足すれば、礼子の横でまた開いて、大きないびきをかいて寝た。

武先生は、めったに最後までいかないけれど、礼子は十分いつも満足だった。

「ねえ、武先生、うばすて山って昔あったでしょう。あれって、すごいですよー」

私の働いているグループホームだって、他の老人施設だって、現代のうばすて山よねといおうとしてやめた。

「僕の年ならもう捨てられてるよ。まさか若い礼子君と、こんな風に……」

「そうになったら、私、映画のようにタイムマシーン作って、ちがう時代に先生と逃げます」

ベッドのシーツを胸までかけている礼子の、肩までたらし茶色の髪を、武は静かになぜ、さっきの乱れた髪を整えてやっていた。

その手を礼子は手に取って、まだ、熱くほてる自分の頬につけた。

そのとき突然礼子の左手を武がつかんで、

14

「どうしたのこれ、キスマークじゃないよね」

左の二の腕のあたりが二センチほど赤く盛りあがっている。

「ちがうわよ」

武は腕を離した。

「かじったのよ。まるで犬かなんかみたい」

そして、つとめているグルーブホームでの、今日のお風呂の日のことを思い出した。

「トメさん、そろそろあがりましょう」

今日はどうしたのか、いつもは、ハイって返事をして態度も温和なトメさんが、にこりともしない。白いタイルの壁の方を向き、なにかが見えるように凝視している。

「はい、あがるわよ」

と、腕のわきに手を入れて、浴槽から引っぱりあげようとしたときだった。

「きゃー、なに」

礼子は、思わず叫んでいた。

15

そんな機敏さが、どこにあったのか、トメさんは、礼子の左腕に顔をさっと近づけてきて、思いつきり咬んだ。

いつもはほんとうに静かなトメさんだったから、最初、礼子は何が起きたのか、わからなかった。

その日は、トメさんの八十歳の誕生日だった。

昼間トメさんは、赤いポーチをガサゴソさせなにかを捜していた。が、見つからないのか、下を向いたきりで、今にも泣きそうだった。

礼子の担当だったので、

「トメさんどうしたの、なに捜してるの」

礼子が聞くと、食い入るように礼子の顔をじーと見つめて目を離さない。

「さあ、今日はトメさんの誕生日よ。みんなにお祝いしてもらおうから、お化粧しましょうか」

礼子が最後までいうかわいわないうちに、ト

16

メさんは満面の笑顔で、細い目がなくなるくらい、なおさら細めている。

「綺麗にしましうね、トメさん。色が白いからこの口紅似合うわよ」

ポーチから赤色の口紅を手にとると、急にトメさんは不機嫌になり、頭を激しく振って、「いやだ、いやだ」といいだした。

そして礼子の唇を指差して、

「トメのとった、トメのとった」といいだす。

礼子はその日、ピンクの口紅をつけていた。私物を貸すのは厳禁と婦長からいわれているので、礼子の口紅をつけてあげるわけにもいかになく困っていると、ほかのヘルパーさんが、「トメさん、もうみんな食堂に集まり、誕生会待つてるわよ、早く早く」

と行って礼子に目くばせをして、連れていってしまった。

きつと私、トメさんには入居の時から持ってきた大事な口紅をとった人になってるのね。でも、そんなことは、ここのグループホーム

17

ム「愛」では、日常茶飯事なので、礼子はたいていしきにもしていなかったけれど……。

ピンクの口紅そんなにつけたかったなんて……。

ヘルパーの手助けがないとボケていて、なんにもできなく、それこそ生きていられない。そんなトメさんの中にまだ女の部分が残っていた。

礼子は自分も女だけに、それがなおさら哀れで悲しかった。

なにごともしなかったようにもうトメさんは、すまして座っている。

老人施設のグループホーム「愛」は、一階、三階が、自分で身の回りのことができる、六十五歳以上で健康な人が入室している。そして、三階、四階は介護の必要とする人達で、ボケ症状の人達も入っていた。

賃貸のワンルームマンションを、グループ

18

ホーム「愛」と、マンションのオーナーとで、共同経営という形をとっていた。

もともとキッチンとトイレ、お風呂つきで十二畳ほどの若者向けの個室マンションだったので、そこはあまり手を入れないで、一階にダイニング、介護しながら入れる大きな浴室、診察室などを設けている。

元気な人達は、その部屋についている小さなキッチンで、夜食ぐらいは作ったりしているが、基本的には、一階のダイニングで食事をとることになっていた。

三階、四階も介護ができるように、壁の仕切りを取ってある部屋もあり、老人の介護度に合わせた部屋に入居してもらっている。

小学校高学年まで、家に祖母がいたせいか、礼子はお年寄りがきらいではなかった。

祖母は折り紙でよく遊んでくれた。

短大の福祉科をでて、ケースワーカーの資格も、持っていたが、実際はヘルパーさんと同じ仕事で食事の介護や、おしめを取りかえ

19

たりの世話などやらされている。

ここで働きだして、礼子はしみじみとわかった。老人は子供に返り、赤ん坊になるのだと確信した。でも子供は、しぐさも愛らしいし、純粹そのものだったが、老人はその人の生きてきた人生経験通りに曲がっていたり、疑ったりで、毎日接して働く者にとっては、かなりしんどく、音をあげて、やめた人達もたくさんいる。

「あつ、そうだった」

血液検査を明日受けるようになって、婦長にいわれたのを思いだした。あと三ヶ月後と六ヶ月後に、もう一度採血して診ることになっている。

トメさんは、B型肝炎を持つてる人だと知らされている。困るよ、大丈夫かなー、妊娠してなくてほんとうによかった。でもいろいろ心配してもどうにもならない。やっぱりエトセトラだわ。礼子の母の口ぐせを思わずつぶやいていた。

この休んでる三日間の間、トメさんのことで、皆んなでミーティングを開いてるはずだ。患者に、けがさせないようには、よくミーティングをしたけれど、あんなに温厚なトメさんが、まさか、かじってくるとは。

誰もそんなこと思わなかった。

ぼけると恐いし悲しい……。

後で旭川の母に久しぶりで電話してみよう。

介護をしている老人は、話はボケていても、礼子が抱き起こして椅子に座らせたりするとき、礼子の胸に男の老人は、はなから震えてる手でさわってきたり、顔をうずめようとしてたりしてくる。

三十歳の礼子は、そんなとき人間って、老人って何だろうと思ってしまう。

常日頃、介護してる老人達と同じぐらいの年齢の武先生、どんなセックスをするのだろう。興味があったのは確かだった。

21

でも、そんな関係だけだったはずなのに……。今、受話器を置いた後、涙がでるなんて。礼子はいつもゆったりとした、まるで悠久の時をくれる武を失いたくなかった。

でも家での武先生は奥さんのいる普通の人だった。

「なーんだ、じゃただの不倫じゃない」

とわざと試みて涙をふいた。

「ダイヤの指輪買ってもらおうかな……」

その次は、ブランドのバッグ……。

そして次には車までいっちゃおう……」

なにしろ私は、七十歳の人の子供妊娠して、墮ろしたことになるのだから……。

明日は当直だった。窓から外を見ると、粉

雪は、横なぐりの吹雪になっていた。

「朝には雪、晴れてね。遅刻できないの。トメさんも、さわりたいがり屋のひげさんも、みんな私の介護を待ってる人達だから」

氷ったガラス窓におでこをつけると、冷たくて気持ちよかった。

雪は、
まだ
まだ
まだ
だった。